

# 門阪遺跡発掘調査報告

## －多気郡多気町牧字門阪－

1997・3

三重県埋蔵文化財センター



門阪遺跡全景（上）／SK36（下）

# 例　　言

- 1 本書は、三重県多気郡多気町牧字門阪に所在する、門阪遺跡(もんさかいせき)の発掘調査報告書である。
- 2 本書は、平成8年度農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の第7分冊である。
- 3 調査にかかる費用は、その一部を国庫補助を受けて三重県教育委員会が、他を三重県農林水産部と地元多気町が負担した。
- 4 調査および整理の体制は以下の通りである。

調査主体	三重県教育委員会		
調査担当	三重県埋蔵文化財センター	調査第一課　主事	越賀　弘幸
整理担当	三重県埋蔵文化財センター	調査第一課・管理指導課	伊藤　裕之
足立純子、有川芳子、石橋秀美、井村浩子、柿原清子、川口愛、楠純子、倉田由起子、小林桂代子、須賀幸枝、杉原泰子、武村千春、田中美樹、豊田幸子、中川章世、中山豊子、西田衣里、西村秋子、長谷いづみ、八田明美、浜崎佳代、早川陽子、松本春美、松月浩子、三谷朱美、森島公子、柳田敬子			
- 5 調査にあたっては、三重県農林水産部農地整備課、松阪農林事務所、多気町教育委員会、多気町産業課および地元の方々からご協力を頂いた。
- 6 遺構の実測は、調査担当者の他、三重県埋蔵文化財センター調査第一課の前川嘉宏、坂倉一光が行った。
- 7 本書の執筆は伊藤、越賀が分担して行い、目次に明記した。全体の編集は伊藤が行い、写真撮影は越賀が行った。
- 8 本書の方位は、真北を用いた。なお、磁北方位は、西偏6度20分（平成5年、国土地理院）である。
- 9 本書で用いた遺構表示記号は、下記の通りである。

S B = 挖建柱建物	S K = 土坑	S D = 溝	S A = 柱列	S Z = 不明遺構
-------------	----------	---------	----------	------------
- 10 本書で報告した記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。
- 11 スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。  
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

## ＜本文目次＞

1 調査に至る経過	(伊藤裕之)	1
2 位置と環境	(伊藤裕之)	1
3 層位と遺構	(越賀弘幸)	6
4 遺物	(越賀弘幸)	14
5 結語	(越賀弘幸・伊藤裕之)	18

## ＜挿図目次＞

第1図 遺跡位置図	2	第8図 S K26平面図・断面図	8
第2図 遺跡地形図	3	第9図 S K31遺物出土状況図	8
第3図 調査区位置図	4	第10図 S K33平面図・断面図	8
第4図 遺構平面図	5	第11図 S Z 9 平面図・断面図	8
第5図 調査区東壁土層断面図	5	第12図 S K16・S K17・S K23実測図	9
第6図 S B51、S A52、S A53平面図 ・断面図	7	第13図 S K36実測図	10
第7図 S K11遺物出土状況図	8	第14図 遺物実測図	15
		第15図 遺物実測図	16

## ＜表 目 次＞

第1表 遺構観察表	12	第3表 遺物観察表	16
第2表 遺構観察表	13	第4表 遺物観察表	17

## ＜図版目次＞

図版1 調査区全景	20	図版4 S K36	23
S B51・S A53		S Z 9	
図版2 S K31	21	図版5 作業風景	24
S K33		図版6 出土遺物	25
図版3 S K16・S K17・S K23	22	図版7 出土遺物	26
S K26			

# 1 調査に至る経過

門阪遺跡は、多気郡多気町牧字門阪に所在する遺跡である。平成8年度県営畜産経営環境整備事業（多気勢和地区・中牧団地）に伴う発掘調査である。今回の調査区は、平成5年に実施された試掘調査に

より遺構が確認された800m<sup>2</sup>についてである。調査期間は、平成8年6月24日から7月30日までの37日間である。なお、7月27日には、地元向けに現地説明会を実施した。  
(伊藤 裕之)

# 2 位置と環境

門阪遺跡<sup>(1)</sup>は、行政上は多気郡多気町牧に位置する。台高山脈の国見山、高見山の奥深くに源を発する櫛田川は、上流では深い谷を刻み、中流域では河岸段丘を発達させ、下流では豊かな沖積平野を形成する県下有数の大河川である。生活の痕跡となる遺跡は、旧石器時代から中世に至るまで、櫛田川流域沿いには数多く見られる。

門阪遺跡のある多気町牧は、櫛田川右岸の中流域にあり、櫛田川が大きく蛇行しながら形成した標高40mほどの河岸段丘上に位置する。段丘後背には丘陵端部が舌状に張り出し、その先端部は浅間山と称され、現在でも浅間信仰の対象となっている。丘陵の鞍部は、鍋倉峠とよばれ、中牧と北牧とを分けている。同峠の西側は宇扇館といい、その南方の標高100mの山頂平坦地には牧城跡<sup>(2)</sup>が所在する。「勢陽五鉢遺響」には「岡小四郎住セリ北畠家臣ナリ<sup>(3)</sup>」の記述がある。

県道勢和兄国松阪線が真っ直ぐに伊勢自動車道の下をくぐる現在では、峠の面影を偲ぶ由もないが、門阪遺跡の南100mのところの十字路には、江戸中期頃の道別れ地蔵が立ち、「右いせみち」「左まつさかみち」と刻まれているのが読める。伊勢本街道と対岸の広瀬に通じる渡船場に向かう街道との分岐である。当遺跡のすぐ東を通るこの道は、根本峠を経て和歌山街道に通じる短絡路（大師道）であった<sup>(4)</sup>。牧周辺は、津留と並んで、交通の要所であったことが伺える。今でこそ、静かな農村に過ぎないが、江戸時代までは参宮客で賑わったことであろう。

さて、歴史的に周辺を概観すると、櫛田川中流域の河岸段丘面上には、旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡が多い。旧石器時代の野々尻遺跡<sup>(5)</sup>、縄

文時代早期の大原堀遺跡<sup>(6)</sup>、堀木遺跡<sup>(7)</sup>、柳浦遺跡<sup>(8)</sup>がある。中期になると、新殿木戸遺跡<sup>(9)</sup>がある。後期では、対岸に王子広遺跡<sup>(10)</sup>がある。門阪遺跡周辺でも縄文時代の遺物包含地は多く、津留周辺の大久保遺跡<sup>(11)</sup>、合道遺跡<sup>(12)</sup>、鎌岩遺跡<sup>(13)</sup>、上牧周辺の中ノ平西遺跡<sup>(14)</sup>、中ノ平東遺跡<sup>(15)</sup>、脇ノセコ遺跡<sup>(16)</sup>、左岸の上ノ広遺跡<sup>(17)</sup>、大原堀遺跡、王子広遺跡、北牧周辺の花の木遺跡<sup>(18)</sup>、奥ホリ遺跡<sup>(19)</sup>、浅間山北遺跡<sup>(20)</sup>、浅間山南遺跡<sup>(21)</sup>、勢和村丹生の下村A遺跡<sup>(22)</sup>等がある。

弥生時代になると、遺跡分布は中流域から下流域に移行し、中流域の遺跡は激減する。歴史時代となると、白鳳期の創建と考えられる御麻生廬庵寺<sup>(23)</sup>をはじめとして、この地域でも寺院の建立が盛んになってくる。牧瓦窯跡群<sup>(24)</sup>は8世紀初めから中頃に操業されたと考えられる窯跡で、7基の登り窯と1基の平窯が確認された。御麻生廬庵寺や松阪市丹生寺町の丹生寺廬庵寺へ瓦を供給していたことが判明している。この地も、仏教の興隆を迎えたことが窺える。平安時代になると、神仏習合思想に基づいて丹生成就院神宮寺<sup>(25)</sup>が建立される。神宮寺は、丹生での水銀採掘や女人高野としての篤い信仰などにより繁栄した。水銀は伊勢国の特産物として奈良・平安時代から盛んに採掘されたようであるが、江戸時代中頃には途絶える。

律令制下では、度会・飯野両郡とともに多気郡は神三郡として、伊勢神宮の政治的・経済的支配に組み込まれ、多くの御厨・御園が設置されていく。また、寺社の莊園も設置されていくが、神宮や各寺社との間にはしばしば紛争がおこるのである。

律令制と関わりの深い条里制は、当地の東側の相

可まで及び、現在でも三疋田・四疋田などの条里制に因む地名とともに条里制の地割り<sup>3</sup>が今も残る。

鎌倉時代末期からの南北朝の動乱は、神宮による支配体制を解体し、柳田川中流域に中世城館を築かせていく。室町時代になると、南朝方に立った伊勢国司の北畠氏の支配を受け、各要所の地に城や砦を築いて一族や家臣を配して、支配を強める。先に述べた牧城もそのひとつである。中世の遺跡は、当地一帯で確認される。北牧周辺では鍬形中世墓群<sup>4,5</sup>をはじめ積尊寺遺跡<sup>6,7</sup>がある。鍬形中世墓群は、室町時代前半の総数13基の石組や集石を伴った墓が確認された。積尊寺遺跡は、室町時代前半の遺跡で掘建柱建物や土坑、性格不明の集石遺構等が検出された。門阪遺跡のある中牧では、堂ノ前遺跡<sup>8,9</sup>、川

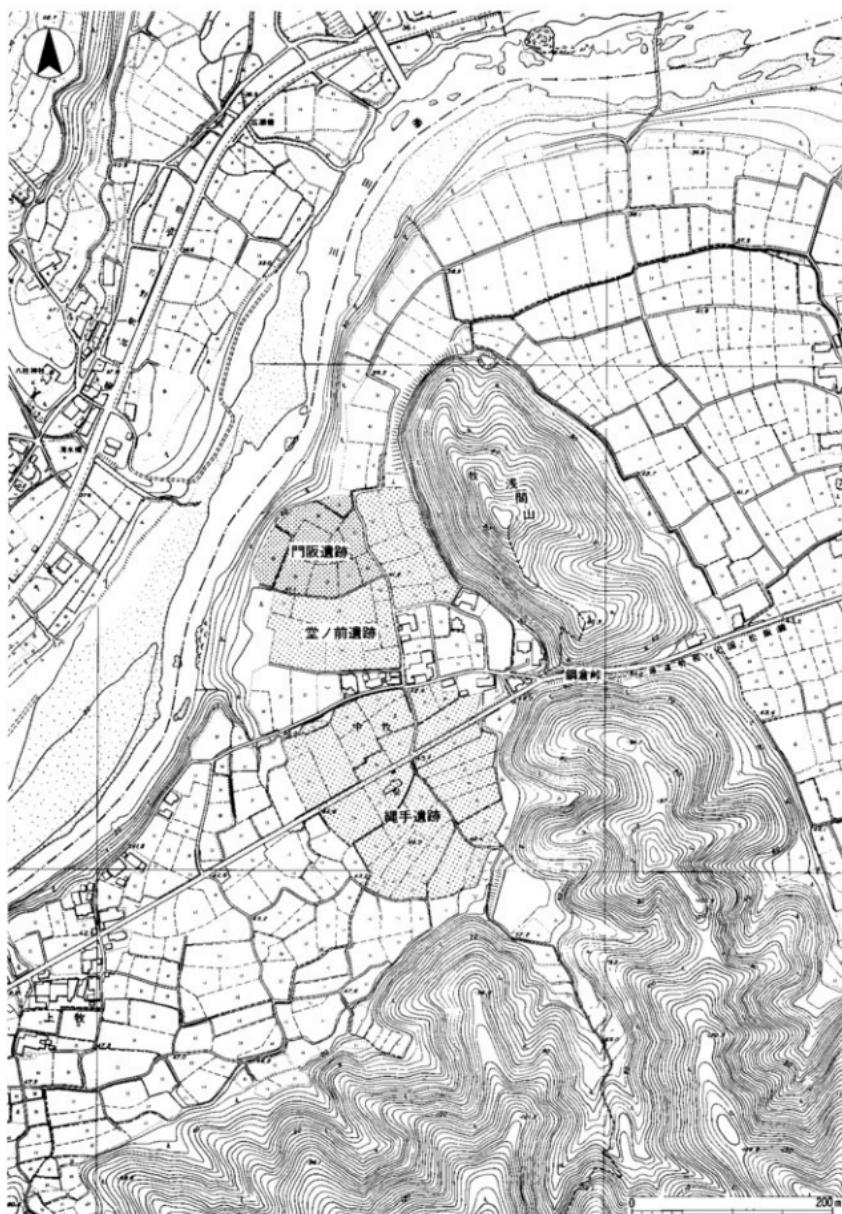
ノ上遺跡<sup>2,10</sup>、宮谷遺跡<sup>2,9</sup>、牧城があり、浅間山両山麓に中世の遺跡がひろがる形となっている。

南北朝の激しい争乱の後も、伊勢国司として北畠氏は度会郡を引き続き支配するが、やがて織田信長の伊勢侵攻により滅亡し、中世的社會も終末を迎え、織豊政権下に組み込まれていくのである。

(伊藤裕之)



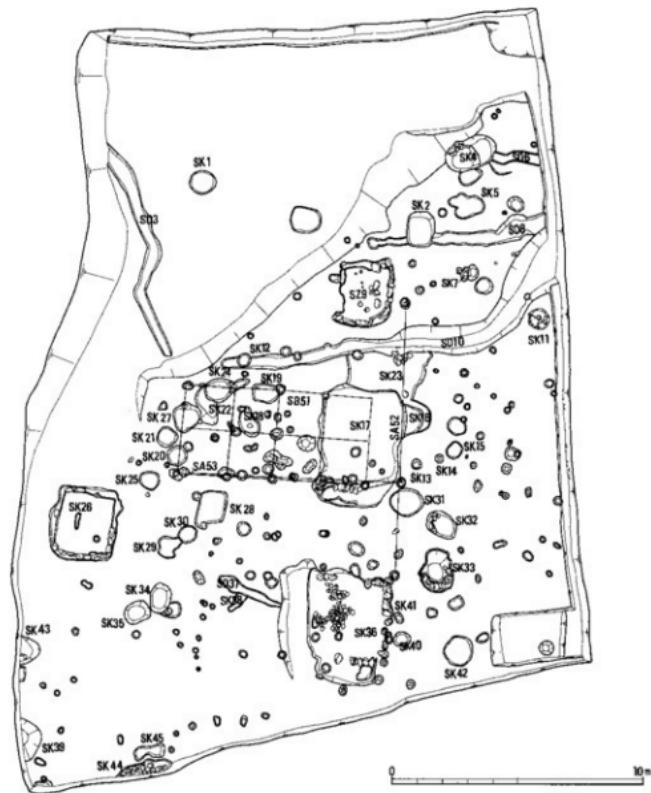
第1図 遺跡位置図 (1:50,000) (国土地理院「大河内」「松阪」「横野」「国東山」1:25,000より)



第2図 遺跡地形図 (1:5,000)



第3図 調査区位置図(1:2,000)



第4図 透構平面図 (1:200)



第5図 調査区東壁土層断面図 (1:100)

### 3 層位と遺構

#### 1. 基本層位

調査区は、柳田川中流域右岸、現況は標高40mの水田である。柳田川が、右岸に張り出した丘陵に沿って大きく蛇行する部分で川に向かってなだらかに傾斜する段丘上に位置する。

基本層序は、耕作土・床土直下に明褐色土（遺物包含層）が広がり、その下層に明褐色系を中心とする砂質土あるいは砂の基盤層が存在する。

調査区の北西部においては、包含層である明褐色

色土の下に黒色粘質土層が約60cmの深さで堆積していたが、この黒色粘質土層上面では明確な遺構検出はできなかった。但し、中世の生活面は、黒色粘質土層上にも存在していた可能性は高い。

調査区の数カ所には、近世以降のものと思われる土坑があり、20~50cmの礫が多量に投棄されていた。おそらく開墾時に礫を投棄したものと思われる。

（越賀弘幸）

#### 2. 遺構

今回の調査で確認された遺構は、大半が中世後半のものであり、奈良時代後半頃と平安時代頃のものもわずかであるが確認された。

##### (1) 中世以前の遺構

###### (イ) 土坑

S K 3 8 調査区南部分の中央部で検出した東西約0.4m、深さ約0.05mの土坑であるが、浅い窪みの可能性もある。S D 37に切られており、南北の規模は不明である。平安時代後期頃の土師器甕が出土している。

S K 4 0 調査区南東部分で検出した南北約0.6m、東西約0.7m、深さ約0.2mの土坑である。奈良時代頃の土師器甕と杯が出土している。

##### (2) 中世の遺構

この時期の遺構には、掘建柱建物・柱列・土坑・溝のほか、多数のピットが認められる。およそ14世紀後半から16世紀前半にかけてのものがほとんどであるが、13世紀前半頃のものも一部認められる。

###### (イ) 掘建柱建物

S B 5 1 (第6図) 調査区中央部で検出した掘建柱建物である。東西4間(約7.6m)、南北2間(約3.6m)の総柱建物と思われる。また、いくつのかの柱穴底部には根石が配置されており、その石を追って東側を精査したところ、建物南辺においてS

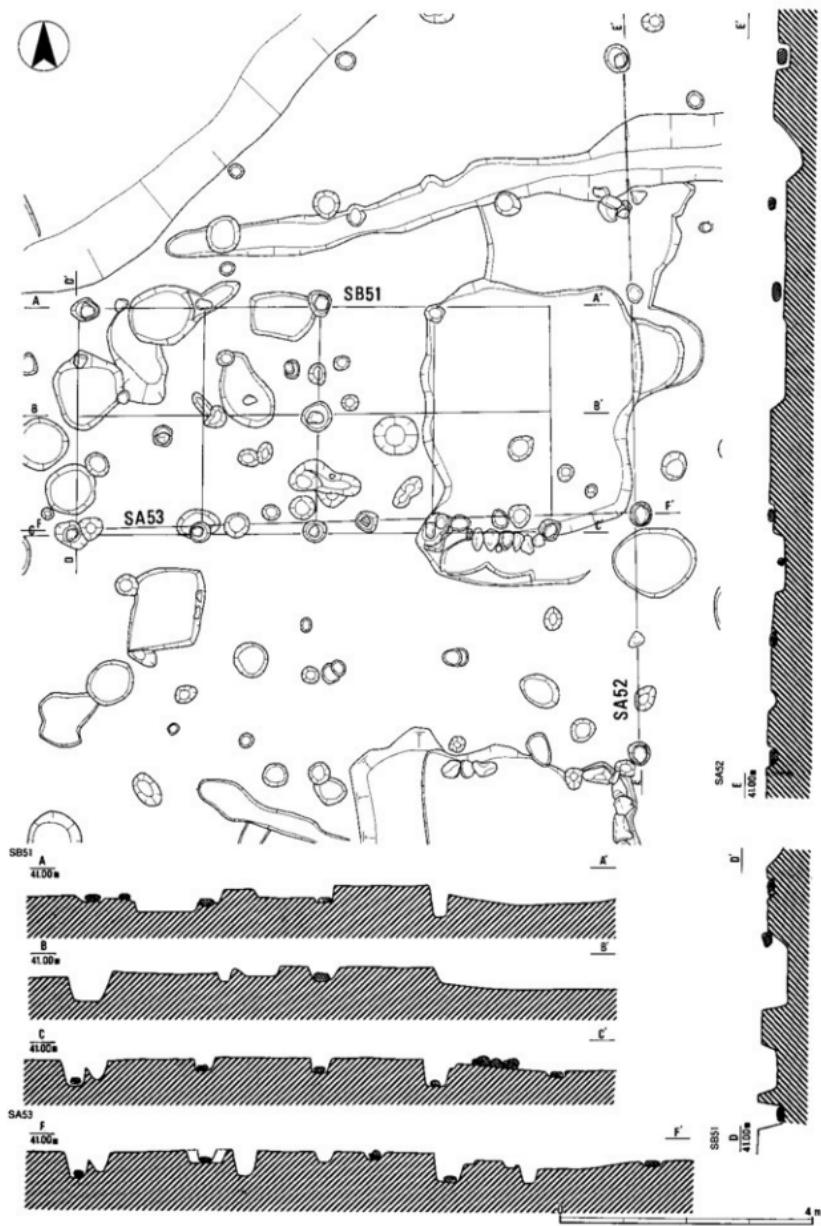
K 17埋土下にも同規模の柱穴・根石を検出した。しかし、北辺においては柱穴・根石とともに確認できなかった。柱間は、東西方向が約1.8~1.9m、南北方向が約1.8mである。柱穴からは土師器皿・鍋・甕、陶器甕等が出土しており、東側2間分の柱穴がS K 17に切られていることから、15世紀前半以前のものであると考えられる。

###### (ロ) 土坑

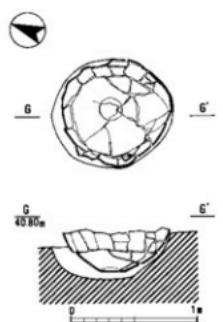
S K 4 調査区北東部分で検出した東西約2.0m、南北約1.2m、深さ約0.3~0.5mの土坑である。土坑の西側半分は北辺のみに石組みが残っており、東側部分よりも一段深くなっている。2基の土坑が存在したと考えられるが、明確な埋土の差異や出土土器から見た時期の差異も認められなかった。土師器皿・鍋・甕、陶器甕・鉢・山茶碗等が出土しており、13世紀後葉~14世紀初頃の遺構と考えられる。S D 6を切っている。

S K 7 調査区北東部分で検出した南北約0.6m、深さ約0.3mの土坑である。東側は別の小穴によって切られており、規模は確認できなかった。埋土中から直径約20cmの平石が出土した。柱穴である可能性もある。出土遺物は中世の土師器片が数点あるだけで、明確な時期は不明である。

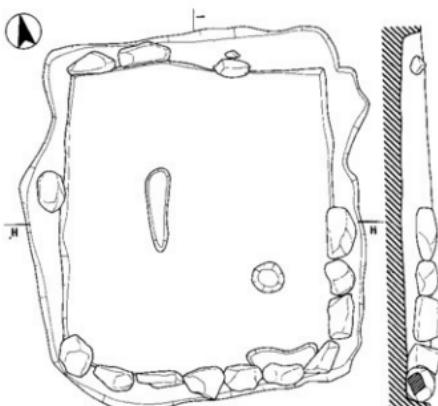
S K 11 (第7図) 調査区中央部分の東壁付近で検出した直径約0.9m、深さ約0.8mの陶器甕が埋められている。出土遺物には繩文土器片、土師器皿・



第6図 SB51、SA52、SA53 平面図・断面図(1:80)



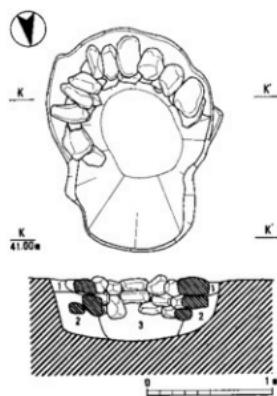
第7図 SK11 遺物出土状況図 (1:40)



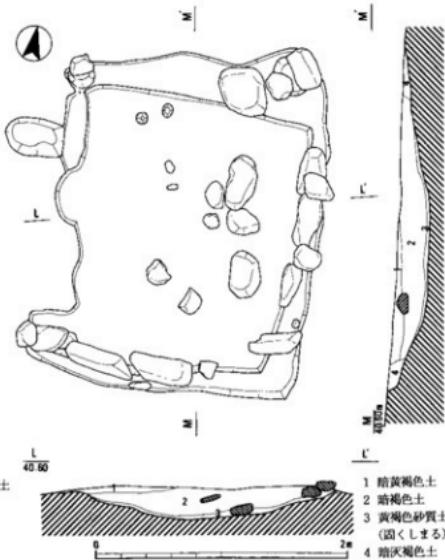
第8図 SK26 平面図・断面図 (1:40)



第9図 SK31 遺物出土状況図 (1:40)



第10図 SK33 平面図・断面図 (1:40)

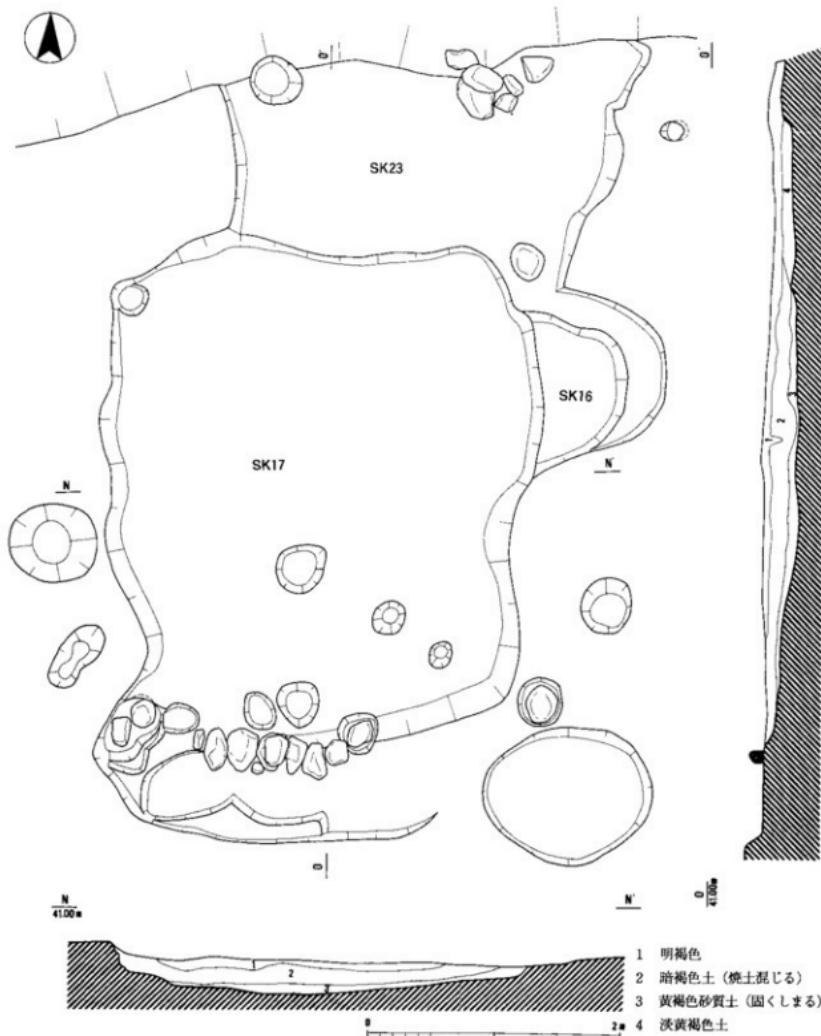


第11図 SZ9 平面図・断面図 (1:40)

壺、陶器鉢・山茶椀、銭貨（熙寧元寶）等がある。土師器皿の外面底部に、重ね焼き痕と考えられる焼成不良が認められるものが1点出土している。15世紀前半頃の遺構と考えられる。

SK16（第12図） 調査区中央部分で検出した南

北約1.3m、深さ約0.4mの土坑である。西側はSK17に切られており、規模は不明である。底は2段になっており、2つの遺構が重複している可能性もあるが、明確な埋土の差は認められなかった。土師器皿・鍋・甕等室町時代の遺物が出土していることと、



第12図 SK16、SK17、SK23 実測図 (1:40)

S K 23を切っていることから、15世紀前半頃の遺構であると考えられる。

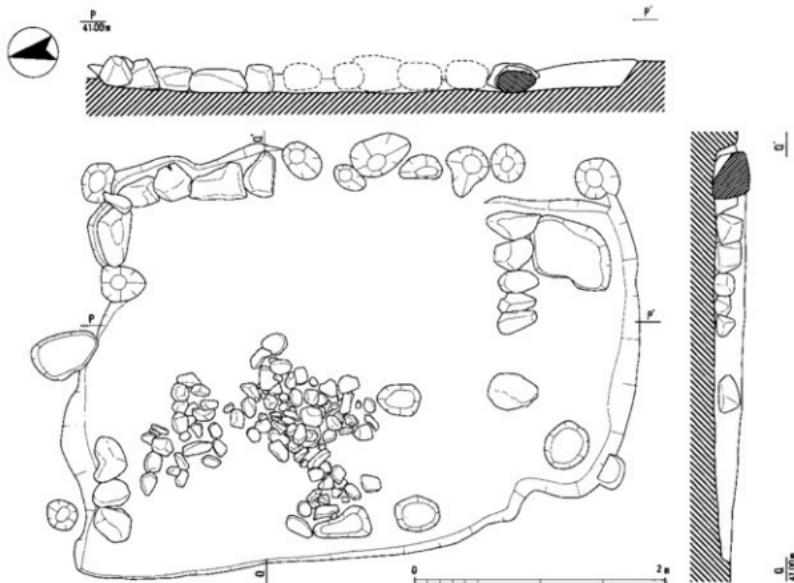
**S K 17 (第12図)** 調査区中央部分で検出した南北約4.5m、東西約3.3m、深さ約0.2mの土坑である。南辺にのみ石組みが残る。石組みは内側に面を揃えており、1段ないし2段分が残存していた。石組みより南側は石組みの掘形と考えられる。出土遺物は土師器皿・鍋・壺・碗・加工円盤、陶器壺・鉢・山茶椀等があり、15世紀前半頃のS K 16より新しい遺構であると考えられる。S K 16、S K 17、S K 23の境界あたりに焼土混じりの部分を検出したが、浅い窪み状のものであったため、詳細は不明である。

**S K 23 (第12図)** 調査区中央部分で検出した東西約3.0m、南北約0.2mの土坑である。北部はS D 10に切られ、南部はS K 16、S K 17に切られていた。また、S D 10との境界あたりに溝の肩の補強用のものと考えられる20~30cm大の礫を検出した。出土遺物は土師器皿・鍋、陶器山茶椀、瓦等がある。14~15世紀前半頃の遺構と考えられる。

**S K 26 (第8図)** 調査区南東部分で検出した南北約3.0m、東西約2.6m、深さ約0.2mの周囲に石組みを持つ土坑である。内側に面を揃えて20~30cm大の礫が一段並べられており、南辺はすべて残っていた。出土遺物は土師器皿・鍋・羽釜、陶器壺・山茶椀、釘状の鉄製品等があり、15世紀前半頃の遺構と考えられる。

**S K 31 (第9図)** 調査区南東部分で検出した東西約1.3m、南北約1.1m、深さ約0.2mの土坑である。土坑縁辺部から山茶椀が3点出土している。また、土坑中央部に10cm大の礫が1個確認できた。出土遺物は土師器皿・鍋・壺、陶器山茶椀等がある。山茶椀の時期から13世紀中頃の遺構であると考えられる。土坑の規模や出土遺物から、中世墓の可能性もあるが、詳細は不明である。

**S K 32** 調査区南東部分で検出した南北約1.3m、東西約1.0m、深さ約0.2mの土坑である。土坑西壁に20~30cm大の礫が4個残っている。西壁以外では、礫や掘形は検出できなかったが、周囲に石組み



第13図 SK36 実測図 (1:40)

を持つ土坑であった可能性もある。土師器皿・鍋・甕・炭化木などが出土しており、14世紀頃の遺構と考えられる。

S K 3 3 (第10図) 調査区南東部分で検出した南北約1.8m、東西約1.3m、深さ約0.5mの土坑である。南側半分には最大3段の石組みが確認できた。一見、石組井戸にも見えるが、深さ約0.5m程で砂質の基盤層が検出され、井戸とは考えにくい。周辺の土坑と同様の周囲に石組みを持つ土坑と考えられる。土師器皿・鍋・甕・椀・陶器甕・山茶椀・不明鉄製品等の遺物が出土している。14世紀以後の遺構と考えられる。

S K 3 6 調査区南部分で検出した南北約4.5m、東西約3.3m、深さ約0.2mの周囲に石組みを持つ土坑である。他の土坑と同様に石組みは内側に面を揃えている。北辺と南辺は比較的石の残りがよく、東辺では石は少ないが、石の残っていない部分で抜き取り痕と思われるピットを確認した。西辺は攪乱により、石、抜き取り痕とともに確認できなかった。また、土坑中央部から北西側の床面に、5~20cm程の石が敷かれていたが、それ以外の箇所では検出できなかった。出土遺物は土師器皿・甕・ロクロ土師器椀・陶器甕・鉢・山茶椀・不明鉄製品等がある。ほぼ13世紀前半頃の遺構と考えられる。

#### (ハ)柱列

S A 5 2 (第6図) 調査区中央部東寄りで検出した南北の柱列である。6分間約10.8mの柱列と思われるが、北から2基目と4基目のピットについては確認できなかった。柱列には根石が配置されており、ほぼ遺構検出面とほぼ同レベルで石が確認できた。柱列からの出土遺物はなく、時期は明確ではないが、S K 23内では確認できたが、S K 16内では確認できなかったことから、S K 23より新しくS K 16より古いと考えられ、ほぼ15世紀前半頃のものと考えられる。

S A 5 3 (第6図) 調査区中央部で検出したS A 52に直交する柱列である。東西4分間約8.6mの柱列と考えられる。S B 51の南辺に沿うように検出されたが、切り合い関係は不明である。S A 52との交点にあたる東端のピットは根石のレベル等から、共有していかなかった可能性もあるが、今回の報告では直

交する2本の柱列と考えておくことにする。柱穴からは土師器皿・鍋・陶器甕・墨書のある山茶椀等の破片が出土しているのみで、明確な時期はわからないが、S A 52とほぼ同時期のものとみてよいだろう。

#### (二)溝

S D 3 調査区北西部の黒色粘質土層の下で検出した検出延長約8.3m、幅約0.6m、深さ約0.1mの溝である。ほぼ南北に蛇行しながら北部は調査区外に延びる。土師器皿・鍋・陶器甕・山茶椀等が出土している。15世紀後半~16世紀初頭にかけて埋まつたものと考えられる。また、東西に走るS D 10と近いレベルの溝であり、直交する可能性もあるが、交点付近では双方とも溝は検出できなかった。

S D 1 0 調査区中央部をほぼ東西に走る溝である。規模は東側で幅約1.5m、深さ約0.8m、西側で幅約0.6m、深さ0.6m、深さ約0.1m、東西検出延長は約15mである。S K 23を切っている。また、東壁付近ではS K 11を避けるように北に屈曲し、幅も広がり、深くなってしまっており、調査区外に延びる。出土遺物は13~14世紀頃と16世紀頃の大きく2時期に分かれることで、調査区東壁付近には別遺構があった可能性もあるが、溝埋土の観察では確認できなかった。黒色粘質土層のある調査区西部分では検出できず、S D 3との関係も不詳である。出土遺物としては、土師器皿・鍋・羽釜・茶釜蓋・甕・陶器甕・椀・鉢・山茶椀・砥石等がある。16世紀頃の遺構と考えられる。

#### (木)不明遺構

S Z 9 (第11図) 調査区中央部北寄りで検出した周囲に石組みを持つ東西約2.0m、南北約2.8m、深さ約0.2mの土坑である。南辺と東辺では内側にはほぼ面をそろえた状態で石組みが残っており、北辺と西辺には残っていない。また、土坑中央部には石組みに使われていたと思われる30~50cm大の礫が数個確認された。土坑内の床面は、東に深く西に浅い状態で踏み固められていた。北辺の石組み掘形埋土の下層から柱穴を2基検出した。土師器皿・鍋・甕・陶器甕・山茶椀・釘状の鉄製品等が出土している。15世紀前半頃の遺構と考えられる。

(越賀弘幸)

遺構名	出土位置	規 様	特 徴	主 な 遺 物	時 代	備 考
SK 1	B2 ～B3	直径約0.9m、深さ約0.1mの円形土坑である。	黒褐色埋土下で検出したため、深さはわずかであった。	土師器皿、鍋片	15C代 以降	
SK 2	D8	東西約1.1m、南北約1.4m、深さ約0.2mの土坑である。	SD8を切っている。	土師器皿・鍋・ 杯、陶器壺・山 茶碗	室町期	
SD 3	B2 ～B4	検出延長約8.3m、幅約0.6m、深さ約0.1mの溝である。	調査区北部の黒褐色土層の下で検出した、ほぼ南北に敷行しながら、北部は調査区外に延びる。	土師器皿・鍋・ 陶器壺・山茶碗	15後 ～16初	常滑窯産の陶器甕
SK 4	E2	東西約2.0m、南北約1.2m、深さ約0.3m～0.5mの土坑である。	土坑の西側半分は北辺のみ石組みが残っており、東側部分よりも一段深くなっている。SD6を切っている。	土師器皿・鍋・ 陶器壺・杯・ 山茶碗	13C後 ～14C 初	伊藤編年のIIb前半の土師器鍋
SK 5	E2	東西約1.5m、南北約1.0m、深さ約0.1mの土坑である。	浅い窪みか？	土師器片	中世	
SD 6	E2	幅約0.4m、東西検出延長約2.0m、深さ約0.1mの溝である。	東側は調査区外に延び、西側はSK4に切られており、それ以西ではSD6は検出できなかった。	土師器皿・鍋・ 甕	室町	
SK 7	E3	南北約0.6m、深さ約0.3mの土坑である。東側は別の小穴によって切られており、規模は確認できなかつた。	理土中から直径約20cmの平石が出土した柱穴である可能性もある。	土師器片	中世	
SD 8	D8 ～F3	幅約0.5m、東西検出延長約7.0m、深さ約0.1mの溝である。	途中SK24によって切られている。東側ではSD10に切られ、調査区外に延びる。黒褐色土以西では検出できなかった。	土師器皿・鍋	室町	
SZ 9	D8 ～D4	周囲に石組みを持つ東西約2.0m、南北約2.8m、深さ約0.2mの土坑である。	南辺と東辺では内側にはほり面をそえた状態で石組みの丸穴で、北辺と西辺では残っていないかった。また、土坑中央部には石組みに使われていたと思われる。	土師器皿・鍋・ 甕、陶器壺・山 茶碗、釣?	15C前	30～50cm大の礎が数個確認された。土坑内の底面は、東に深く西に浅い状態で積み固められていた。北辺掘削の礎下層から柱穴を2基検出した。
SD10	C4 ～F3	南北に東西側で幅約1.5m、深さ約0.1m、東西検出延長は約15mあり、東側は調査区外に延び、黒褐色土以西では検出できなかった。	調査区東壁付近は別造構があった可能性もある。SK23を切っている。	土師器皿・鍋・甕・ 茶釜壺・羽釜・ 壺・鉢・ 山茶碗、灰石	13～14 ・16C	
SK11	F4	直径約0.9m、深さ約0.3mの土坑である。	直径0.8mの陶器甕が埋められている。	織文土器片、土 師器皿・甕・ 陶器壺・鉢・ 山茶碗、銭貨(熙寧元寶)	15C前	
SK12	C4	直径約0.6m、深さ約0.2mの土坑である。	SD10を切っている。	土師器皿・鍋	室町	
SK13	E5	直徑約0.4m、深さ約0.1mの土坑である。		土師器皿	室町	
SK14	E5	直徑約0.4m、深さ約0.2mの土坑である。		土師器皿・鍋	室町	
SK15	E5	直徑約0.7m、深さ約0.2mの土坑である。		土師器皿・甕	室町	
SK16	D6 ～E5	南北約1.3m、深さ約0.4mの土坑である。西側はSK17に切られており範囲は不明である。	底は2段になっており、2つの造構があった可能性もある。SK23を切っている。	土師器皿・鍋・ 甕	室町	
SK17	D6	南北約4.5m、東西約3.3m、深さ約0.2mの土坑である。南辺にのみ石組みがある。	SK16, 17, 23境界あたりに焼土塊じりの部分を検出したが、浅く詳細は不明である。	土師器皿・鍋・甕・ 加工円盤・ 陶器壺・鉢・山 茶碗	15C前	
SK18	C5	南北約1.2m、東西約0.8m、深さ約0.3mの土坑である。	ほぼ中央部で直径20cm程の平石を検出した。建物の根石の可能性もある。	土師器皿	室町	
SK19	C5	南北約0.8m、東西約1.0m、深さ約0.2mの土坑である。		土師器皿・鍋・ 甕、陶器壺・山 茶碗	室町	
SK20	B5	直徑約0.8m、深さ約0.2mの土坑である。		土師器皿	室町	
SK21	B5	直徑約0.8m、深さ約0.2mの土坑である。		土師器皿・鍋・ 陶器壺・山茶碗	室町	

第1表 遺構観察表

SK22	B6 ・C5	約3.5m×約1.5m、深さ約0.2mの土坑である。	下層でSK24とSK27とに分かれる。	土師器皿・鍋、陶器山茶椀	15C後	
SK23	D4 ・E4	東西約3.0m深さ約0.2mの土坑である。	北部はSD10に切られ、南部はSK16、17に切られる。	土師器皿・鍋、陶器山茶椀、瓦	14～15 前	
SK24	C5	SK22の下層で検出した直径約1.0m、検出面からの深さ約0.4mの土坑である。		土師器皿・鍋、陶器山茶椀	室町	切り合い不明
SK25	B5 ・B6	直径約0.8m、深さ約0.2mの土坑である。		土師器皿・鍋	室町	
SK26	A6 ・B6	南北約3.0m、東西約2.6m、深さ約0.2mの周囲に石組みを持つ土坑である。	内側に面を掘えて20～40cm大の縁が一段並べられている。南辺はすべて残っている。	土師器皿・鍋、羽釜、陶器皿、山茶椀、町?	室町	
SK27	B5	SK22の下層で検出した直径約1.2m、深さ約0.4mの土坑である。	SK22に隣接する遺構である。周辺から平石を検出したが、柱穴は検出されなかった。	土師器皿・鍋、陶器山茶椀	15C前	
SK28	O6	南北約1.2m、東西約1.1m、深さ約0.6mの土坑である。	埋土中に一部焼土が混じっている。	土師器皿・鍋、甕、陶器鉢、山茶椀、山皿、鉢	13C後 ～14C	
SK29	B6	南北約0.8m、東西約1.0m、深さ約0.1mの土坑である。	SK30に切られている。	土師器皿・鍋	室町	
SK30	B6	直径約0.7m、深さ約0.2mの土坑である。	SK29を切っている。	土師器皿・鍋	15C中	
SK31	E6	東西約1.3m、南北約1.1m、深さ約0.2mの土坑である。	土坑縁辺部から山茶椀が3点出土している。また、土坑中央部に10cm程の縁が1個確認できた。	土師器皿・鍋、甕、陶器山茶椀	13C中	中世墓の可能性があるが、不明。
SK32	E6	南北約1.3m、東西約1.0m深さ約0.2mの土坑である。土坑西壁に人頭大的の縁が4個残っている。	西側以外で石組み掘形は検出できなかったが、周間に石組みを持つ土坑であった可能性もある。	土師器皿・鍋、甕、炭化木	14C	
SK33	E6	南北約1.8m、東西約1.3m、深さ約0.5mの土坑である。土坑半分には最大3段の石組みが確認された。	深さ0.5m程で砂質の基盤層が検出され、井戸とは考えにくい。周辺の土坑と同様の、周間に石組みを持つ土坑と考えられる。	土師器皿・鍋、甕、山茶椀、不明鉢	14C以降	
SK34	B7	南北約1.2m、東西約0.8m、深さ約0.2mの土坑である。		土師器皿・鍋、山茶椀	室町	
SK35	B7	南北約0.8m、東西約1.0m、深さ約0.3mの土坑である。		土師器皿・鍋、甕	室町	
SK36	D6 ・D7	南北約4.5m、東西約3.3m、深さ約0.2mの周間に石組みを持つ土坑である。他の土坑と同様に石組みは縁側前面を掘えている。	北辺と南辺は比較的石の残りがよく、東辺では石は少ないが、抜き取り痕と思われる小穴を確認した。	土師器皿・甕、ロクロ土器、陶器山茶椀、天目系鉢、山茶椀、不明鉢	13C前	土坑中央部から北西側の床面に、5～20cm程の石が敷かれていた。西壁は擾乱により、ほとんど確認できなかった。
SD37	O6 ・C7	幅約0.3m、深さ約5cm、検出延長約2.5mの溝である。	SK38を切っている。	土師器皿	中世	東側はSK36と擾乱により検出できなかった。
SK38	C7	東西約0.4m、深さ約5cmの土坑である。	SD37に切られており、南北の規模は不明であるが、浅い溝のみの可能性もある。	土師器甕	平安後	
SK39	A8	南北約1.5m、深さ約0.3mの半円形の土坑である。	西側は調査区外に延びるため、規模は不明である。	土師器皿・鍋	15C後	
SK40	D7 ・E7	南北約0.6m、東西約0.7m、深さ約0.2mの土坑である。		土師器甕・杯	8C中～後	
SK41	D7 ・E7	南北約0.5m、東西約0.3m、深さ約0.1mの土坑である。		土師器皿・鍋	中世	
SK42	E7	南北約1.3m、東西約1.2m、深さ約0.1mの土坑である。		土師器皿・鍋、陶器山茶椀	中世	
SK43	E7	南北約1.1m、深さ約0.2mの半円形の土坑である。西側は調査区外に延びるため、規模は不明である。		土師器甕、陶器山茶椀	15C後	
SK44	B8	東西約2.1mの土坑である。南側は調査区外に延びるため、規模は不明である。	20cm大の礫が大量に廃棄されていた。	土師器甕、陶器山茶椀	15C後	調査区外のため、規模は不明である。
SK45	B8	南北約0.5m、東西約1.2m、深さ約0.1mの土坑である。		土師器皿・鍋、陶器甕	15C後	

第2表 遺構観察表

## 4 遺

## 物

出土した遺物はコンテナパットに換算して約23箱である。奈良時代から近世までのものがあるが、大部分が中世後期のものである。以下、出土遺物の概略を記述する。個々の遺物の詳細については出土遺物観察表を参照されたい。

### (1) 中世以前の遺物

縄文土器、奈良時代の土師器杯・土師器甕、平安時代のロクロ土師器碗・土師器甕等が出土している。縄文土器 1は、細部小片であるが、後期初頭のものと思われる。

土師器杯 2は、口縁部を横ナデし、外面底部をヘラケズリし、内面底部に螺旋状の暗文を施したものである。また、内外面とも一部黒変している。3は高台がつき、外面底部をハケ後ミガキし、内面底部に螺旋状の暗文を施す。ともに奈良時代後期のものと思われる。

土師器甕 5は内外面ともに頸部より下にハケを施す。内面頸部付近には『×』状のヘラによる痕が認められるが、意識的なものではなく、ヘラ当たりによる痕跡の可能性が高い。8世紀後半頃のものと考えられる。4は口縁部の形態から、弥生～古墳時代頃の甕の可能性があるが、外面のハケメ等から6同様8世紀後半頃のものと考えてよいであろう。

### (2) 中世の遺物

土師器皿 SK11から出土したほぼ完形の土師器皿(8)には、外面に重ね焼き痕による焼成不良と考えられる黒変が認められる。7・8・11とともに、13世紀後半の頃のものであろう。

土師器鍋 SK17出土の9は、口径が約36cmの大型の土師器鍋で、外面には横にハケメが施され、口縁端部に折り返しのないものである。この形は他にほとんど出土例がなく、南伊勢系土師器鍋の大型のものは別系統のものであろう。時期としては、伊藤裕偉氏の南伊勢系土師器鍋編年<sup>9</sup>の3a～3bの時期に相当するものと思われる。調査区東壁面のS D 6埋土から出土した17は比較的残りが良く、ほぼ完形

のまま溝に埋められた可能性があるが、調査区壁面崩落の危険があるため完掘できず、器の全体像は不明である。

土師器鉢 S D10出土の21は、外面を押された後、縦のハケを施してある鉢状の器である。類例として岩出地区遺跡群のケカノ辻・角垣内地区出土のものがあり、底部は高台が付く。今回の調査でも同様の高台が出土しているが、21と同一個体であるかの確認はできなかった。

陶器山茶碗 13世紀前半頃の遺物としてSK31出土の尾張型の山茶碗(13～15)がある。3点とも高台部分がナツケで幅広くなっている、モミガラ痕が残る。内面底部の磨耗の具合は3点で差が認められる。15はほとんど擦れておらず、13はやや擦れおり、14はその中程度の擦れ方である。いずれも、藤澤良祐氏の山茶碗編年<sup>9</sup>による尾張型の第6型式にあたるものである。C5グリッドPit 1出土の山茶碗(27)もほぼ同様の調整が施される。また、山茶碗のなかには外面底部や側面に墨書の認められるものも数点出土している(25・31)。

その他の陶器 常滑窯産の甕(16)、瀬戸産のおろし皿(26・34)等がある。

磁器 青磁碗が出土しているが、出土数は少ない。35は、蓮弁文を施した龍泉窯のもので13世紀前半頃のものである。

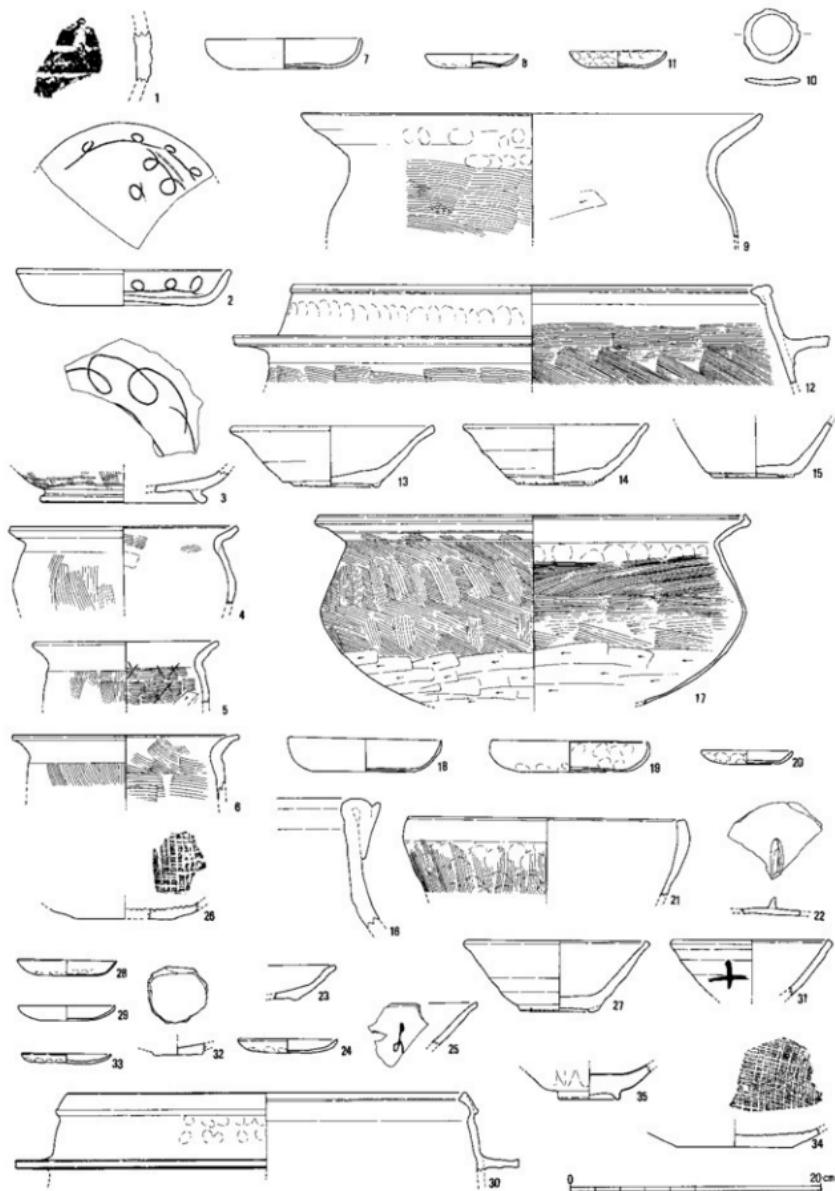
金属製品類 釘状の鉄製品が十数点出土したが、いずれも腐食が激しく原形をとどめないものが多い。

東壁面から火打金(39)が1点出土している。平面二等辺三角形をなし、打撃部が反り上がり、紐穴のないものと思われる。2/3程が残存する。銅貨は、北宋銭2点(40・42)と朝鮮銭1点(41)が出土している。

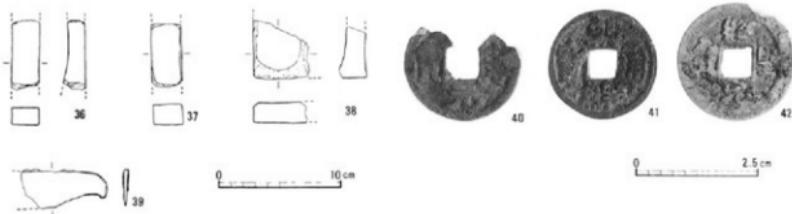
石製品類 磨石(36～38)がある。

その他 SK17から円形加工品(10)が1点出土している。土師器甕の体部を磨き、縁辺部を薄く仕上げている。もう1点(32)は陶器の底部が円形に残ったもので、円形加工品の可能性がある。

(越賀弘幸)



第14図 遺物実測図 (1:4)



第15図 遺物実測図 (1:4、40~42は1:1)

番号	実測No.	位置	遺構名	器形	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	保存度	備考
1	11	5	F3	SK 11 縄文土器	-	外:沈没後縄文 内:ナデ	粗(～3mmの小石含む)	並	外:赤黄 内:灰黄	少 量	後期(北白川上層頃)。
2	4	2	E7	SK 40 土師器 杯	(口)16.8 (高)2.9	外:ヨコナデ・ナデ・ケズリ 内:ヨコナデ・螺旋状縄文	やや密	並	橙	1/4	暗文の切り合ひ不明。 内外面一部黒変。
3	5	4	C7	包含層 土師器 皿	(底)12.6	外:ヨコナデ後ヘラミガキ・ヨコナデ ナデ 内:ナデ螺旋状縄文	やや密(微 砂粒)	並	橙	1/3	杯B。
4	11	2	F3	包含層 土師器 皿	(口)17.8	外:ヨコナデ・ハケ 内:ヨコナデ・ハケ後ナデ	やや密	並	外:にじる 内:浅黄緑	1/8	古式土師器、奈良後 期?
5	5	3	E7	SK 40 土師器 皿	(口)14.5	外:ヨコナデ・ハケメ 内:ヨコナデ・ハケメ	やや密(微 砂粒)	並	外:にじる 内:灰白	1/6	内面稍部に『×』状 にヘラ跡。
6	11	1	E6	SK 31 土師器 皿	(口)18	外:ナデ・ハケ 内:ナデ・ハケ	やや粗(～3 mmの小石含む)	並	にじる 4種	1/8	
7	1	4	D6	SK 4 土師器 皿	(口)12.4 (高)2.3	外:ナデ・オサエ 内:ナデ	やや粗	並	淡黄	4/5	
8	2	2	F4	SK 11 土師器 皿	(口)7.6 (高)1.1	外:ヨコナデ・オサエ 内:ヨコナデ	やや密	並	淡赤	完 存	底面に焼成不良と思 われる変色。
9	10	1	D6	SK 17 土師器 鍋	(口)36.4	外:ナデ・オサエ・ハケメ 内:ナデ・ケズリ	粗(～2mm の小石含む)	やや 不良	外:にじる 内:灰黄褐	口 縁 1/6	中世の大形鍋。出土 例少ない。
10	6	4	D6	SK 17 加工円 盤	(径)4.2	外:ハケメ 内:ナデ	密(微 砂粒)	並	浅黄緑	完 存	
11	6	2	D4	SK 23 土師器 皿	(口)7.7 (高)1.2	外:オサエ 内:オサエ後ナデ	密(微 砂粒 含む)	並	浅黄緑	完 存	
12	3	1	B6	SK 26 羽釜	(口)38.0 (高)44.5	外:ヨコナデ・貼付ナデ・ハケメ 内:オサエ・ヨコナデ・ハケメ	やや粗	並	淡黄	1/4	外面鏽より下、全体 にスス付着。
13	1	2	D6	SK 31 山茶碗	(口)16.2 (高)4.7	外:クロコナデ <sup>1</sup> ・系切り瓶・モミ ガラ瓶 内:クロコナデ <sup>1</sup>	並	並	灰白	1/2	高台をなでつけ薄く 幅広。尾張6、No.1
14	1	1	L6	SK 31 山茶碗	(口)14.7 (高)5.5	外:クロコナデ <sup>1</sup> ・系切り瓶・モミ ガラ瓶 内:クロコナデ <sup>1</sup>	やや粗	並	灰白	5/6	口縁部なし。 尾張6、No.2
15	1	3	E6	SK 31 山茶碗	(底)4.7	外:クロコナデ <sup>1</sup> ・モミガラ瓶 内:クロコナデ <sup>1</sup>	やや粗	並	灰白	1/3	高台をなでつけ薄く 幅広。尾張6、No.3
16	5	2	B4	SD 3 陶器 壺	-	外:クロコナデ 内:クロコナデ	やや粗(1～ 2mm大の 小石)	並	褐色 にじる 4種	小 片	常滑産。
17	4	1	F2	SD 6 土師器 鍋	(口)33.8	外:ヨコナデ・ハケメ・ヘラケズリ 内:ヨコナデ・ハケメ・ヘラケズリ	やや密	並	にじる 黄緑	1/4	外面全体スス付着。 伊藤福年4C。 東壁面
18	1	5	E4	SD 10 土師器 皿	(口)11.8 (高)2.9	外:ナデ・オサエ 内:ナデ	やや粗	並	淡黄	4/5	

第3表 遺物観察表

番号	実測No.	出土場所	遺構名	器形	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	斑点	備考
19	6	I	D4 SD 10	土師器 皿	(口)12.3 (高)2.4	外:ナデ・オサエ 内:ナデ・オサエ	やや密(微 砂粒)	並	灰白	口縁 1/8	
20	6	3	D4 SD 10	土師器 皿	(口)7.4 (高)1.0	外:オサエ内:オサエ後ナデ	やや密(微 砂粒)	並	灰白	完存	
21	3	2	E4 SD 10	土師器 鉢	(口)22.0	外:ヨコナデ・オサエ後ハケメ 内:ヨコナデ・ナデ	やや密	並	にぶい黄緑	1/4	高台が付くものか?
22	6	5	D4 SD 10	土師器 茶釜 蓋	-	上:オサエ・ナデ 下:オサエ・ナデ	密	並	にぶい黄緑	つま み部 分	
23	6	8	D4 SD 10	陶器 綠釉皿	(口)12	外:ロクロナデ・糸切り痕・施釉 内:ロクロナデ・施釉	密	並	淡黄 灰白	小片	瀬戸産。
24	6	6	D4 SZ 9	土師器 皿	(口)7.9 (高)1.1	外:ナデ・オサエ 内:ナデ	やや密(微 砂粒含む)	並	浅黄緑	1/4	
25	2	4	D4 SZ 9	陶器 山茶碗	-	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	やや粗(~2 mmの小石 あり)	並	灰白	少 量	墨書きあり。尾張産。
26	9	2	C5 SZ 9	陶器 おろし 皿	(底)8.0	外:ロクロナデ・糸切り痕 内:ロクロナデ後網目状模様	密	良	にぶい黄緑	底部 1/4	瀬戸産。裏込めから 出土。
27	5	1	C5 PT 4	陶器 山茶 碗	(口)14.2(高)5.7	外:ロクロナデ 内:ナデ・貼付 高台・ヨコ	やや 密	並	灰白	底部	底部完存
28	2	1	C5 包含層	土師器 皿	(口)7.5 (高)1.2	外:ヨコナデ・オサエ 内:ヨコナデ・オサエ	やや密	並	灰白	完存	
29	2	3	E4 包含層	土師器 皿	(口)7.8 (高)1.2	外:ヨコナデ・オサエ 内:ヨコナデ	やや密	並	灰白	3/5	
30	10	2	AB 包含層	土師器 羽釜	(口)31.4	外:ヨコナデ・ナデ・オサエ 内:ナデ	密	やや 不良	浅黄緑	口縁 1/16	
31	8	1	E2 包含層	陶器 山茶碗	(口)12.5	外:ロクロナデ・墨書き 内:ロクロナデ	やや粗(1 mm~3mm の砂粒含む)	良	灰白	1/6	尾張産。墨書き
32	10	3	B8 包含層 加工品 鑄?	陶器 (底)3.8	外:糸切り痕・ナデ 内:ロクロナデ	やや密	並	灰白	底部	完存	
33	10	4	表 土	土師器 皿	(口)7.1 (高)0.75	外:オサエ 内:ナデ	やや密	並	外:浅黄緑 内:にぶい黄緑	5/8	
34	9	1	表 土	陶器 おろし 皿	(底)9.0	外:ロクロナデ・糸切り痕 内:ロクロナデ後網目状模様	密	良	にぶい黄緑	底部 1/4	瀬戸産。
35	8	2	表 土	青磁 碗	(底)5.0	外:ロクロナデ・ロクロ削り・運弁 文 内:ロクロナデ	密	良	灰白 釉薬:灰オリーブ	底部 1/2	外面とも釉薬が付 着。龍窑窯。
36	8	3	D7 SK 36	砥石					にぶい黄緑、淡 黄		
37	8	4	E4 SD 10	砥石					灰		
38	8	5	D6 包含層	砥石					浅黄緑 にぶい黄緑		
39	9	3	F2 東壁面	火打金							
40	7	3	F4 SK 11	熙寧元 寶							(北宋)1068年
41	7	1	C5 包含層	朝鮮通 寶							(朝鮮)1423年
42	7	2	E3 包含層	紹聖元 寶							(北宋)1094年

第4表 遺物観察表

## 5 結

今回の調査結果は、多気町内における中世の歴史を考える上で、いくつかの成果を上げることができた。中世以前に関しては、遺構・遺物とともにまとまつたものは出ておらず、残念ながら今回の調査では明確な考察はできなかった。しかし、中世から近世にかけては比較的好資料が発見され、今後の多気町内の歴史的検討のために、貴重な資料となることと思われる。ここでは、中世の集落としての多気町牧地区をいくつかの面から検討してみたい。

今回の調査区は、牧（現在の中牧地区的集落内）を東西に走る伊勢本街道から北に約200mほどはずれた場所であり、櫛田川に向かってなだらかに低くなっていく低位段丘面上にある。牧付近で大きく曲流した櫛田川は、相可で一気に広い平坦地を展開させる。牧地区は櫛田川中流域と下流域との変換点にあたるともいえる。交通の要所であると同時に、伊勢平野への出入口として戦略上重要な場所であったこともうかがえる。室町時代には北畠氏の支配を受け、家臣岡小四郎が鍋倉峠南側の標高100mの山頂に城を築き、麓に居館を構えたと考えられている。櫛田川に舌状に張り出した浅間山の麓の低位段丘面には、多くの中世の遺跡が広がることからも、牧城を中心に麓一帯に集落が点在したのであろう。しかしながら、調査区付近の土質は、砂質土系であるため保水性に劣り、良質の水田は得られにくかったと思われる。したがって、大きな集落には発達し得ず、北畠氏の滅亡とともに埋もれていったのではなかろうか。

今回の調査で、特筆されることとは、周間に石組みを持つ土坑をいくつか検出したことである。S Z 9、

## 語

S K17、S K26、S K36は方形の土坑であり、S K4、S K32、S K33は円形あるいは楕円形の小規模な土坑である。土坑埋土からは、主に中世の土器片が出土した程度であり、土坑の性格を決定付けるような遺物は出土していない。方形の土坑群は、規模・形状からみても、掘建柱建物に伴ういわゆる南東隅土坑のようであるが、S K17以外は周辺に掘建柱建物を確認できなかったため南東隅土坑とは考えにくい。また、四隅の石を根石としてその上に柱を建てていた可能性もあるが、四隅の石には根石として使用された様子もなく、これらの土坑の場合には、覆い屋的な建物の存在も考えにくい。当遺跡周辺の石積みをともなった土坑としては、当遺跡から南東に山を隔てた积尊寺遺跡でも検出され、小祠の故地ではないか<sup>⑤</sup>と考えられている。石組み土坑そのものは、室町時代にはしばしば見られるものであるが、当遺跡の石組み土坑の性格は不明である。また、これらの14世紀後半から15世紀前半頃と考えられる土坑群と、それよりやや下る時期の掘建柱建物および柱列との関連ははっきりしなかった。

中世後期に、櫛田川の石を生活に利用した集落が、伊勢本街道にほど近いこの地域に存在したことが確認された。建物の根石や土坑の周囲に石を利用するこによって、砂質系の脆弱な地盤上に安定した施設を建設したものと考えられる。

調査区を東西に走るS D10等の溝や南北に走るSD 3とこの集落との関連など、今回の調査で不明なまま終わった遺構に関するいくつかの問題点を含め、この遺跡の性格を明らかにするために、今後の調査に期待したい。

（越賀弘幸・伊藤裕之）

① 奥義次「牧城」（『三重の中世城館』 三重県教育委員会、1976年）

② 『勢陽五鉄道圖(4) 駿野郡 駿南郡 多気郡』 三重郷土資料刊行会、1977年

③ 高住春弥ほか「伊勢本街道」（『初瀬街道・伊勢本街道・和歌山街道―歴史の遺調査報告書一』 三重県教育委員会、1982年）

④ 奥義次「大原堀遺跡」（『松阪市史 第二巻 資料編 考古』 松阪市史編纂委員会、1977年）

⑤ 奥義次「王子庵遺跡」（『松阪市史 第二巻 資料編 考古』 松阪市史編纂委員会、1977年）

⑥ 田村陽一「上ノ広（森下池西方）遺跡」（『近畿自動車道（久居一勢和）埋蔵文化財発掘調査報告 第1分冊1』 三重県教育委員会、1989年）

⑦ 田村陽一「花ノ木（山崎）遺跡」（『近畿自動車道（久居一勢和）埋蔵文化財発掘調査報告 第1分冊1』 三重県教育委員会、1989年）

- ⑧ 田村陽一 「浅間山北遺跡」（『近畿自動車道（久居一勢和）埋蔵文化財発掘調査報告 第1分冊1』）三重県教育委員会、1989年）
- ⑨ 田村陽一 「浅間山南遺跡」（『近畿自動車道（久居一勢和）埋蔵文化財発掘調査報告 第1分冊1』）三重県教育委員会、1989年）
- ⑩ 田村陽一 「下村A遺跡」（『近畿自動車道（久居一勢和）埋蔵文化財発掘調査報告 第1分冊1』）三重県教育委員会、1989年）
- ⑪ 下村登良男 「御麻生園寺」（『松阪市史 第二巻 資料編 考古』松阪市史編纂委員会、1977年）
- ⑫ 野原宏司・河北秀実ほか 「牧瓦窯跡群」（『近畿自動車道（久居一勢和）埋蔵文化財発掘調査報告 第1分冊2』）三重県教育委員会、1989年）
- ⑬ 齋永貢三・谷岡武雄編 「伊勢湾岸地域の古代条里制」 東京堂出版、1979年
- ⑭ 野原宏司 「獣形（牧）中世墓群」（『近畿自動車道（久居一勢和）埋蔵文化財発掘調査報告 第一分冊2』）三重県教育委員会、1989年）
- ⑮ 田村陽一 「教導寺（中牧）遺跡」（『近畿自動車道（久居一勢和）埋蔵文化財発掘調査報告 第1分冊1』）三重県教育委員会、1989年）
- ⑯ 伊藤裕偉 「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」（『鍋と甕 そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム、1996年）
- ⑰ 伊藤裕偉 「ケカノ辻・角垣内地区」（『岩出地区内遺跡群調査報告』三重県埋蔵文化財センター、1996年）
- ⑱ 磨澤良祐 「山茶碗研究の現状と課題」（『研究紀要 第3号』三重県埋蔵文化財センター、1994年）
- ⑲ 田村陽一 前掲⑯

図版 1



調査区全景（南から）

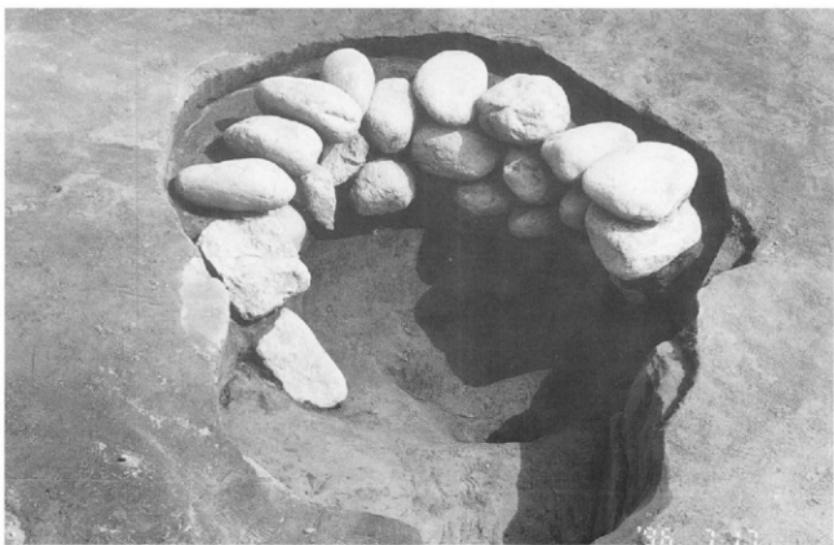


SB51・SA53（西から）

図版2



SK31（北東から）



SK 33（北から）

図版 3



SK16・SK17・SK23（東から）

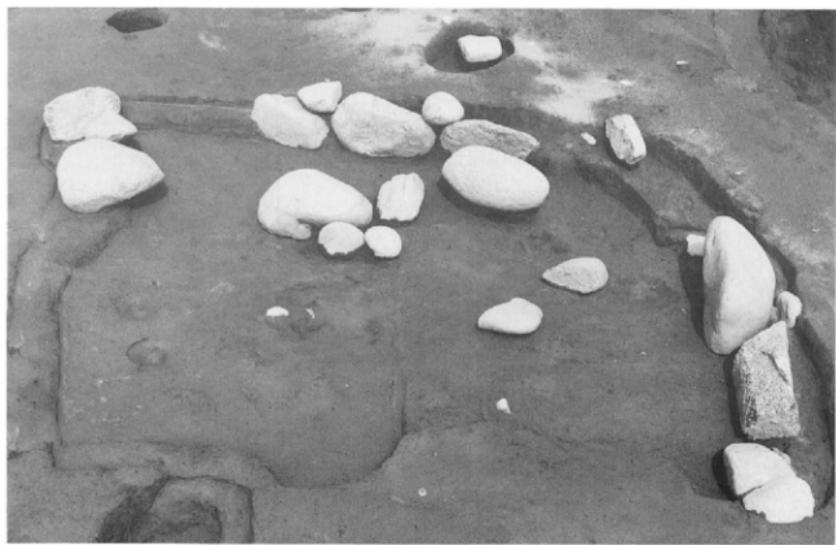


SK26（南から）

図版 4



SK36（南から）



SZ29（西から）

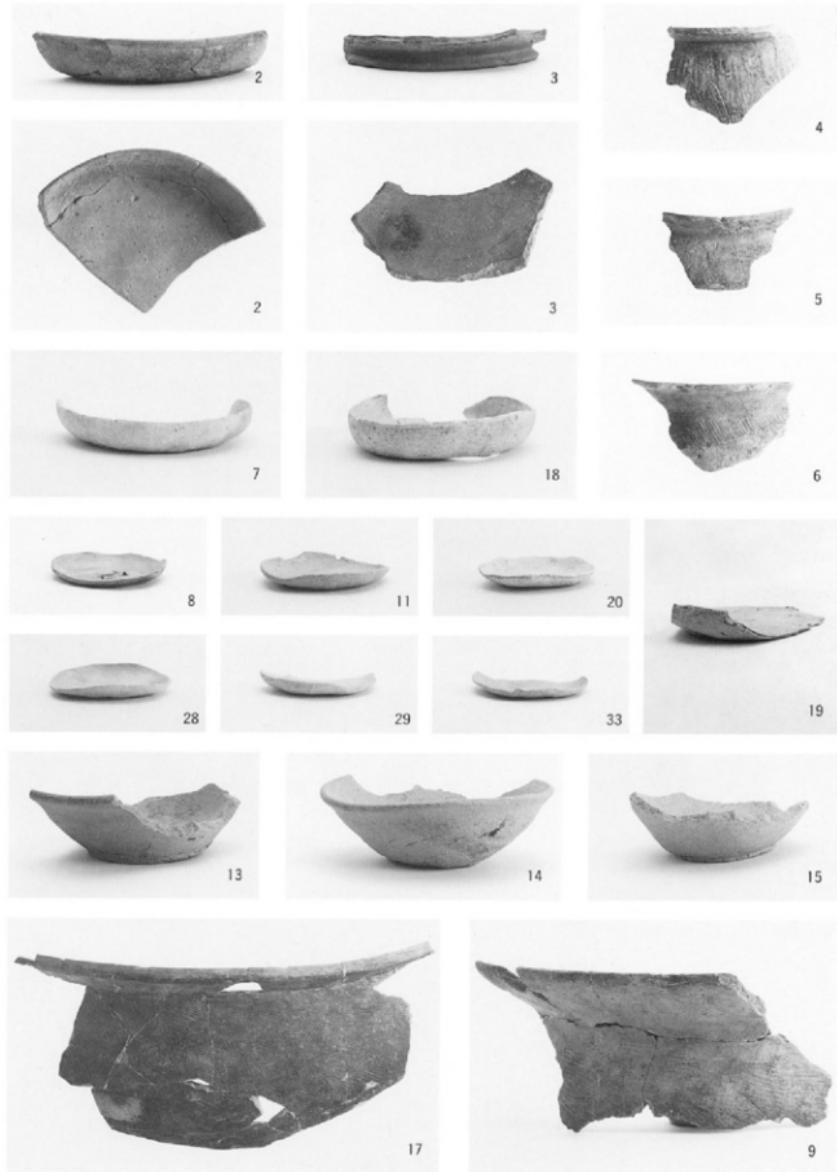
図版 5



作業風景

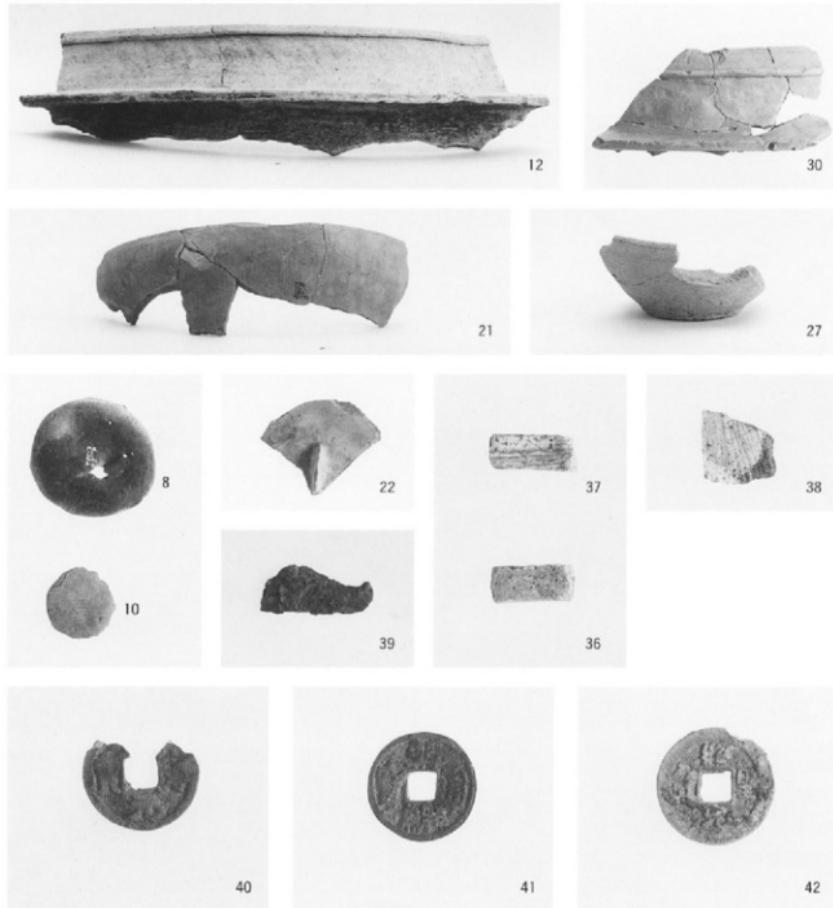


作業風景



出土遺物 (1:3)

圖版 7



出土遺物（1：3、40~42は1：1）

## 報告書抄録

ふりがな	もんさかいせきはくつちょうさほうこく						
書名	門阪遺跡発掘調査報告						
副書名							
巻次							
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	146-7						
編著者名	越賀 弘幸 伊藤 裕之						
編集機関	三重県埋蔵文化財センター						
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL0596-52-1732						
発行年月日	1997年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	北 緯	東 經	調査期間	調査面積m <sup>2</sup>	調査原因
もんさかいせき 門阪遺跡	三重県多気郡多気町牧字門阪	441	34° 30' 04"	136° 29' 34"	19960624 / 19960730	800	平成8年度県 営産経営環境 整備事業 (多気勢和地 区・中牧団地)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
門阪遺跡	集落跡	縄文時代 奈良～平安時代 鎌倉・室町時代	土坑 掘建柱建物 棚列 溝 土坑 ピット	縄文土器 土師器 土師器 陶器 磁器 銅錢 火打金	周囲に石積みがされた土坑が7基		

平成 9(1997) 年 3 月に刊行されたものをもとに  
平成 19(2007) 年 7 月にデジタル化しました。

---

三重県埋蔵文化財調査報告146-7

門版遺跡発掘調査報告

－多気郡多氣町牧字門版－

1997(平成 9)年 3 月

編集発行 三重県埋蔵文化財センター

印 刷 (株)第一プリント社

---